

遺跡から分かる大昔の人々の知恵

1. 単元名 「大昔の暮らしと国づくり」

2. 単元目標

狩猟採集の生活や稲作の始まり、古墳について調べ、稲作とともに人々の定住が進み、「むら」から「くに」をつくっていったこと、さらにその中の勢力をもった豪族が大和朝廷をつくり、国土を統一していったことが分かるようにする。また、くにがひとつのまとまりをもち始めたことについて、神話や伝承をもとに関心をもって調べられるようにする。

3. 評価規準

【社会的事象への関心・意欲・態度】

- ・狩猟・採集をしていたころや農耕が始まったころの当時の人々の暮らしや古墳の大きさや出土品について関心をもち、意欲的に調べている。
- ・神話・伝承を調べ、国の形成について考えようとしている。

【社会的な思考・判断・表現】

- ・狩猟・採集や農耕生活の広まり、豪族や古墳が現れ「むら」や「くに」ができていったことについて、学習問題や予想、学習の見通しをもって考え、表現している。
- ・調べたことを比較したり関連付けたりして、大和朝廷の勢力の広がりや当時の人々の生活の様子について考え、適切に表現している。

【観察・資料活用の技能】

- ・遺跡を見学したり、想像図や写真資料などを活用したりして、狩猟・採集や農耕の生活、古墳についての情報を集め読み取っている。
- ・調べたことから必要な情報を選んで、白地図や年表などにまとめている。

【社会的事象についての知識・理解】

- ・農耕によって人々の暮らしが変化していったことや、農耕の広まりとともに争いが起こり、力の強い豪族によって「むら」や「くに」ができていったことが分かっている。
- ・各地に支配者が現れ、大和朝廷による国土の統一が進められたことが分かっている。

4. 単元について

本単元は、6年の歴史学習最初の単元であり、単元における学習すべき内容をおさえるとともに、歴史学習に対する興味関心を高めたり、調べ方や考え方など歴史の学習の仕方を身につけたりするという視点も考慮し、扱っていききたい単元である。

横浜市歴史博物館には、常設展示とともに、大塚・歳勝土遺跡もあり、原始・古代に関する単元においては当時の様子を体験的に知ることができる。2000年以上昔のことも、実際に見たり触れたりしながら、少しでも身近に感じ、意欲をもって歴史学習を進めていけるようにしたい。

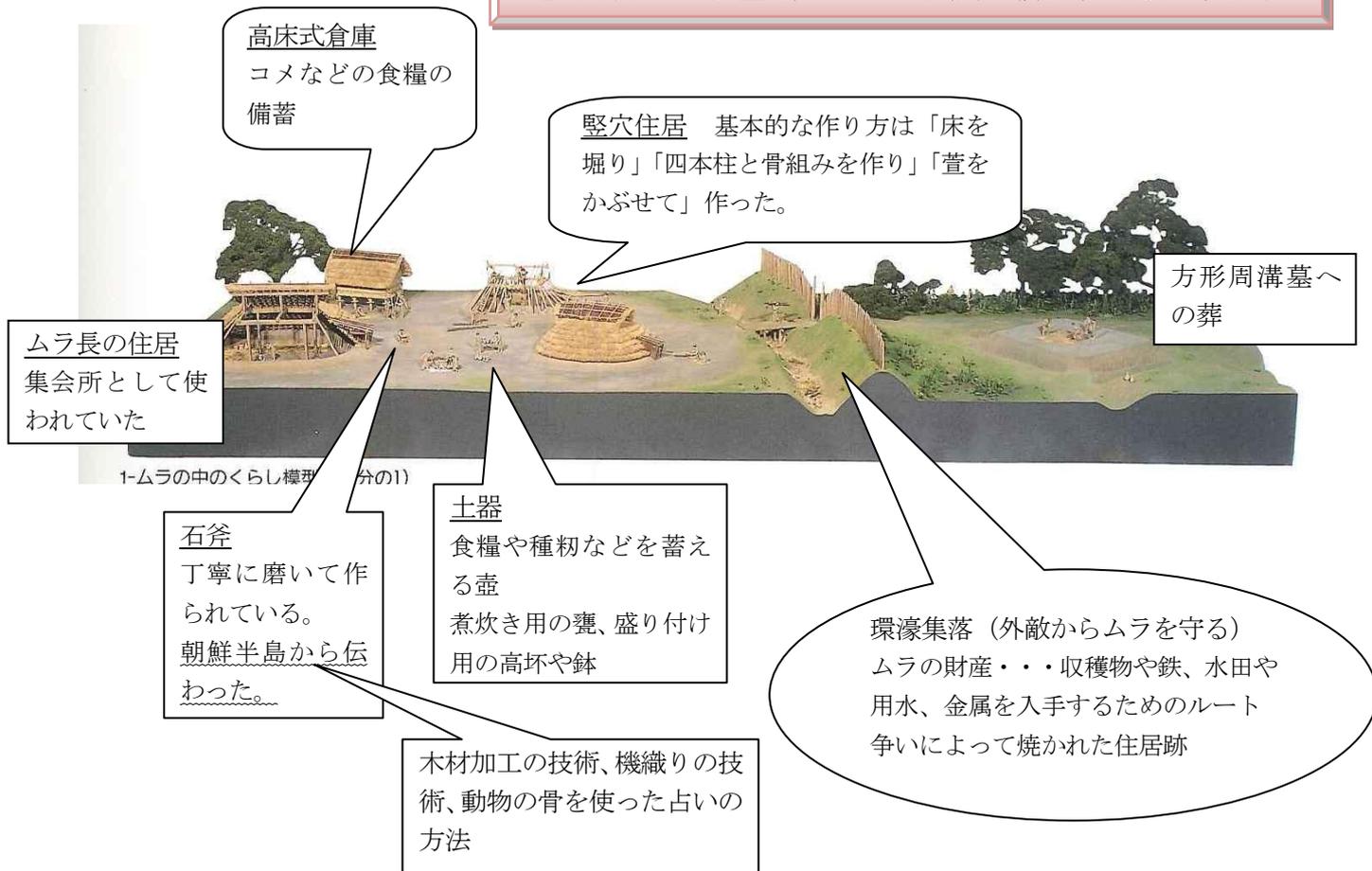
大塚・歳勝土遺跡は、約2000年前の弥生時代中期のムラと墓地を復元したものである。大塚遺跡の環濠集落の跡から、外敵の侵入を防ぐための溝の大きさを実感することができる。また、復元された7棟の竪穴住居には実際に入り、住居のつくりを間近で見て、昔の人々の生活のようすを実感的に理解できる。高床式倉庫の復元もあり、言葉として知っている「ねずみ返し」を実際に見ることで、より歴史への関心が高まるのではないだろうか。このムラの中には、90軒の住居跡があったが、同時に建っていた住居数は20～30軒と考えられ、人口は100人前後であったと思われる。歳勝土遺跡では、低い四角形の盛り土とその四辺を溝で囲んだ形の方形周溝墓を見ることができる。当時の埋葬の様子を見ることで、当時

の人々の暮らしへの関心につながると考えられる。

約2400年前に、朝鮮半島から水田稲作の技術が伝わり、北部九州から近畿地方へと広がっていった。このころ、弥生土器という縄文土器よりも薄く、飾りの少ない土器が作られるようになった。米作りが行われ、弥生土器が使われていた時代を弥生時代という。弥生時代は、低地の森や草木を切り開いて水田をつくり、そこで食糧の中心となる米を生産していた。自然に手を加えることにより、自然の恵み以上のより多くの食糧を得ようとした。稲作の始まりにより、ある一定の土地の中で得られる食糧の量が増え、同じ土地の中で、よりたくさんの人々が生活できるようになった。その結果、人口の急速な増加となり、約2000年前には、無人に近い横浜市域にたくさんの村がつくられはじめた。谷戸の出口や川沿いの低地に水田をつくり、自然を改変することにより、横浜市域の景観も大きく変化していった。

弥生時代のムラについては、歴史博物館常設展示・原始Ⅱの《ムラのなかの暮らし模型》から見てとることができる。この暮らし模型には、竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓、ムラを囲む大きな溝（環濠集落という）、土器、石器、木器、金属器などが表わされており、大塚遺跡の見学と併せて活用することで、縄文時代から弥生時代への変化や大陸から伝わったものなどが分かり、大昔の人々の生活への関心を高めることができる。

とある秋の日の弥生時代のムラの様子（博物館 常設・原始Ⅱ）



5. 指導計画（10時間）

主な学習活動と内容	主な資料（●）と教師の支援（◇）等
<p>1. 「大昔の人々の暮らし」をみてみよう。（2時間） ○絵を見て、狩りや採集をして暮らす大昔の人々の暮らしの様子について、興味・関心を抱く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・石を削って、つり針を作っている。 ・子どもも木の実をとったり仕事をしたりしている。 ・夏は魚を釣り、冬は動物を獲っている。 ・わらでできた家に住んでいる。 ・土器の中に、木の実の粉で作ったものを入れている。 ・縄目の文様のついた土器を、「縄文土器」といい、それが使われていた時代を「縄文時代」と呼んでいる。 <p>2. 縄文時代の人々は、どのような暮らしをしていたのか、詳しく調べよう。（2時間） ○縄文時代の暮らしを、道具や食べ物・住居の様子などから調べ、まとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・12,000～10,000年前に使われていた隆線土器が、都筑区の花見山遺跡から見つかっている。 ・当時の土器は、木の実を効率よく食べやすくするために煮るために使われていた。 ・土器で木の実を煮ることによって、たくさん食べることができるようになった。 ・土器の形の変化から、当時の人々の食生活が豊かになってきたと思う。 ・食が豊かになったことで、定住生活をする「むら」ができていった。 ・当時の人々が住んでいた場所の近くには「貝塚」があり、食べ物のかすやアクセサリなどが捨てられている。 <p>3. 米作りは、どうやって始まったのだろうか。（1時間） ○弥生時代の「むら」の様子を模型写真をもとに、米作りが始まり、生活の様子に変化したことに関心をもつと共に、米作りがどのように伝わってきたのかを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家と倉庫のようなものがある。 ・男の人たちが協力して家を建てている。 ・家の大きさに違いがある。 ・「むら」が溝と柵で囲まれている。 ・米の脱穀をしている。木の実や動物ではなく、米を使っている。 ・米作りが大陸から伝わってきて、食生活が変わった。 	<p>●教科書・資料集などの絵 ◇道具や食べ物、住居、人々の仕事など、分かることを分類して整理することで、資料を見る視点を身につけられるようにする。</p> <p>●縄文土器の形と用途の変遷写真 【博物館 常設・原始Ⅰ】</p>  <div data-bbox="1145 792 1418 972" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><縄文土器の役割></p> <ul style="list-style-type: none"> ・煮炊き ・盛りつけ ・液体を注ぐ </div> <p>●博物館の方の話【博物館エディューケーター】 ◇言葉だけでなく、土器や石器、貝塚などの当時の人々の生活が見えてくる資料をもとに、子ども自身が生活の様子や変化に気付いていけるようにする。</p> <p>●茅ヶ崎貝塚【博物館 常設・原始Ⅰ】 ●海の入りこんでいた都筑【常設・原始Ⅰ】</p>  <p>●歴史博物館の模型写真【常設・原始Ⅱ】 ◇気づいたことを出し合うだけでなく、疑問や予想ももてるようにし、博物館見学の視点をはっきりさせるようにする。</p> 

4. 米作りによって、「むら」はどのように変化したのだろうか。
(3時間) 本時

○博物館見学を通して、「むら」の生活の様子を理解し、米作りによる変化について考える。

- ・環濠集落は、思っていたより大きいな。
- ・平和に暮らしているように感じるけど、違うのか。
- ・遺跡の見方がよく分かった。
- ・大きな「むら」が多くなり、100人以上の人々が住む「むら」も出てきた。
- ・高床倉庫には、村人たちの食糧が蓄えられていた。
- ・土器の形状が変わり、物を蓄える壺が多くなった。
- ・米だけでなく新しい技術も大陸から伝わってきた。
- ・米の作り方が伝わってきたが、良いことばかりではなさそうだった。
- ・「むら」通しの争いごととも起こるようになったようだ。

5. どうして古墳がつくられるようになったのかな。

(1時間)

○古墳の大きさや出土品から、豪族が大きな力をもっていたことを理解する。

- ・たくさんの人が、石や土を運んでいる。
- ・埴輪や勾玉、刀やかぶとも出てきた。
- ・争いごとが起こったのだろうか。
- ・大和地方に大きな古墳がたくさん作られている。
- ・横浜市内にも小さな古墳は数多くあったようだ。
- ・古墳の時代の頃には、武器などは金属器で作られるようになっていく。

6. 「くに」は、どうなっていったのかな。(1時間)

○「くに」が大和朝廷によって統一されていった様子や渡来人が伝えた文化や技術について調べる。

- ・埼玉県や熊本県までも、大和朝廷の力が及んでいた。
- ・渡来人により、古墳づくりやその他の技術が伝えられた。
- ・当時伝えられた土器作りの技術は、今でも伝統として受け継がれている。

●歴史博物館（常設・原始Ⅱ及び大塚歳勝土遺跡の見学）

●ボランティアガイドの話と資料

①博物館見学

②博物館見学をして分かったことを共有

③学習問題について話し合う

◇土器・住居・ムラのつくりなど、視点を
はっきりさせて見学ができるよう、学
習シートなどを工夫する。



●古墳づくりの絵【教科書資料】

●出土品の写真【博物館 常設・古代】



◇出土品や働く人の様子から、当時力をも
っていた人の力の大きさに気付けるよ
うにする。

●稲荷山古墳の鉄剣写真【教科書資料】

●藤の木古墳出土品写真【教科書資料】

◇大陸とのつながりが、今の時代の自分た
ちの生活ともつながっていることに気
付けるようにし、この後の時代にでも意
識してとらえていけるようにする。

6. 本時目標

弥生時代の「むら」の生活について、歴史博物館見学で見たり聞いたりした資料や事実をもとに話し合うことを通して、大陸から伝えられた米作りの始まりによって、人々の生活が豊かになるとともに争いが始まり、一つの大きな「くに」としてまとめられていくようになったことを理解する。

7. 本時展開 (5 / 10)

学習活動 ・ 予想される児童の反応	○教師の支援 ●資料 ※評価
1. 本時の学習内容を確認する。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">米作りによって、「むら」の人々の生活はどのように変化したのだろうか。</div>	
<p>2. 「むら」の人々の生活の変化について話し合い、まとめる。</p> <p>《食事・住居》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米を作ることによって、収穫したものを保存し、安定して食べることができるようになった。 ・毎年同じ所で米を作り、収穫すればよいので、しっかり家を建て、住むようになった。 ・米を作るためには、みんなで協力しなければならないから、「むら」の人口が増え、家も増えている。 ・家だけではなく、米などを保管するための倉庫もできた。 <p>《技術・知恵》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米作りの技術だけでなく、建物を建てる技術も「むら」の人々に身につけている。 ・米がいっぱいとれるように、水田を整備したり、道具を作ったりした。 <p>《集団・争い》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「むら」の長(おさ)が命令を出して家を建てている。 ・大きな家は、「むら」をまとめる長がいるから。 ・収穫物や土地などの取り合いで他の「むら」との争いがおこるから、溝や柵がある。 <p>3. 当時の「むら」の人々の思いを想像し、豊かなくらしと争いの始まりの両面をもつ米作りの始まりの意味を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分は、米作りより狩りや漁の方が楽しそうだと思う。 ・楽しいだけでは生きていけない。ずっと狩りができるわけではないから、米作りをすることで、食料を蓄えられるのは大切だと思う。 ・家族で協力して狩りをする時代の方が、争いがなくて平和だと思う。 ・米作りには、鉄器も使われるようになった。今では当たり前の金属の道具が、このころから始まっていた。 ・リーダーがいることによって、ムラの力が大きくなり、さらに新しいことも始められると思う。 <p>4. 次時の学習問題を確認する。</p>	<p>○変化の様子がわかるよう、縄文時代の生活の様子や気づいたことを見られるようにしておく。</p> <p>●ムラのなかのくらし模型写真【常設】</p>  <p>●大塚遺跡見学の写真</p>  <p>○資料で見える事実と、そこから考えられることをわけて表記していく。</p> <p>○当時(縄文時代と弥生時代)の想像図に吹き出しをつけたり、その様子を見る人の立場に立ったりして、自分だけの感情や思いだけにとどまらないようにする。</p> <p>●鉄器写真</p> <p>※米作りの始まりには、豊かな生活と争いの始まりの両面があるが、そのことで国が統一されていくことにつながることに気付いている。</p>

8. 博物館と学校の連携

①学校連携担当（エドューケーター）による歴史オリエンテーション

見学の下見などの折に、エドューケーターが常設展示や遺跡の資料から、授業展開のポイントなどについてご相談に応じます。（事前連絡を要します 総務課 電話912-7771）

②遺跡見学 ～ 指導の手引き

遺跡を見学することは、何より本物（模擬）体験をすることができる良さがある。萱でできた家、溝や柵など、目にしたり触れたりすることで机上の学習ではできない実感的な理解につながっていくものである。「竪穴住居を見た。すごかった。」で終わらないようにするためには、また、大きさや明るさ、素材だけでなく、自然とともに生きていた原始や古代の人々の知恵や工夫にも目を向けられるようにしたい。日の光を取り入れるための住居の向きや高さの工夫など、今にも引き継がれている人々の知恵に目を向けることで、当時の人々の生活の様子を理解するだけでなく自分の生活に引き寄せて学習することができる。学芸員やガイドボランティアの話を事前に聞き、実際に子どもたちが見学するときに教師が適切なアドバイスをできるように準備したい。

★目を向けさせたい知恵や工夫の例

- ・ 竪穴住居の入口の向きや大きさについて（朝の日の光を取り入れるなど）
- ・ 住居の床部分の利用について（かまどの位置、寝床の位置など）



③4・5月期をずらした見学のすすめ

例) 5年生の3月期に見学する場合

6年生の4月は、学年・学級づくりに力を入れたい時期である。また、市内県内各学校からの見学が多い時期で、博物館内でもゆっくりじっくりと資料と向き合うことが難しい時期である。

そこで、5年生の年度末に歴史学習のオリエンテーションを兼ねて歴史博物館を見学するという方法も考えられる。博物館内を1校程度の人数でゆっくりと見ることができ、学芸員やエドューケーターによる解説もじっくり聞くことができる。資料の見方や歴史の学習の仕方について話を聞いておくことで、6年生になった時にスムーズに学習に入ることもできる。

例) 6年生の6月期以降に見学する場合

同じく、ゆっくりと見学するためには、6月以降に見学する場合もある。歴史学習の入口を過ぎてからではあるが、資料や話合いで学習した内容を、自分の目で確認することができるため、学習内容との関連を意識した見学ができることは大きな利点である。歴史博物館の見方もじっくり学習し、放課後や休日にも気軽に訪れることができる場所として認識できれば、一つの行事や遠足のような見学に終わらず、学習の一環としての博物館活用につながっていく。

常設展示案内や写真等を活用して学習に入り、問題解決・追究の場面としての博物館見学も是非取り入れることをすすめたい。

④常設展示解説本の活用

「常設展示案内」には、歴史博物館の常設展示物の写真と解説が丁寧に記されている。その中の資料を活用したい。土器の変遷年表や、模型のズーム写真などを使うと、焦点を絞って資料として提示することができる。

また、見学前に資料提示することにより、見学での視点も絞られたり身近に感じたりすることができるので、博物館で実物や模型を見る時にも、問題意識をもって目を向けることができる。

⑤常設展示と遺跡公園

常設展示では、問題意識をもってワークシートなどを活用して見学したい。また、遺跡公園では、ガイドボランティアの方に遺跡の見方や遺跡の意味なども話してもらうことで、他の遺跡に行く時にも活用できる。学校や常設展示の模型では感じることはできない竪穴住居の中の大きさを実感的に理解し、歴史に対する興味関心を高めるきっかけとなることも期待できる。